

上代における終助詞カの意味変化とカ文の構造変化

小出祥子

0. はじめに

助詞カについての関心は古代語、現代語ともに高く、多くの研究の蓄積がある。ただし、考察対象として、終助詞カのみを取り上げる研究は少ない。古代語では、「係り結び」に関する係助詞カについての関心が高いためである。しかし係り結び構文の担っていた機能が明らかではないため、その構文内に現れる係助詞カに注目することによって、助詞カの機能を特定することは困難である。本稿では、上代語を対象にして、係り結び構文の影響を受けない終助詞カを考察する。係助詞カと終助詞カの関係について、本稿では特に言及しないが、終助詞カを対象とする本稿の結論は、係助詞カ研究にも有益な記述となりうると考える。

また、従来の終助詞研究は、古典注釈の手法がとられることが多かった。現代語による分析において文末に現れる意味を、考察対象の古代語文末に現れる終助詞に当てはめてきた傾向が強い。その結果、カには疑問・詠嘆などの意味が付与されてきた。勿論その考察は有意義であり、それらの研究によって終助詞カの重要な特徴が明らかにされてきたことは間違いない。しかし、その方法は現代語と古代語の文末の対応関係のみを観察していることにもなりかねず、現代語とは異なる古代語の側面を記述することを困難にする。本稿では、終助詞カ（以下、カ）が現れる文（以下、カ文）に形式として現れる現象面に注目し、カ文の構文構造とカの意味的機能を解明することを目的とする。

また、上代語には、文末に現れるカモという形式がある。カとの意味的な差異が明確ではなく、且つカの用例数に対してカモの用例数が圧倒的に多いため、カとカモを区別せずに考察する研究も多い。しかし、本稿ではカとカモが異なる機能を持つ可能性を重視し、カモは考察対象に含まない。同様に他の助詞と接続するバカ、トカ、カト、テカという形式についても、問題が煩雑になるのを避けるため、本稿では考察対象としない。また、テシカという形も、前接するテ・シの来歴が明らか

になつてゐないため、考察対象から除く。用例は「〇/〇〇」という形で、万葉集の巻、番歌号の順に示す。「記」は古事記であり、「紀」は日本書紀を示す。

1. カ文の形式

上代のカ文は、係助詞モの有無と、カに前接する語によって、以下の8タイプに分類できる。①～④は助詞モが常に出現し、⑤～⑧はそうではない形式である。カが仮名書きで確認できた用例の数を()内に示した。

①一モ一カ形式 (17例)

03/0265 苦しくも(苦毛)降り来る雨か(零来雨可)三輪の崎狭野の渡りに家もあらなくに

②一モアルカ形式 (17例)

03/0459 見れど飽かずいましし君が黄葉のうつりい行けば悲しくもあるか(悲喪有香)

③一モ一ヌカ形式 (16例)

04/0520 ひさかたの雨も降らぬか(雨毛落梗)雨障み君にたぐひてこの日暮らさむ

④一モアラヌカ形式 (8例)

04/0708 またも逢はむよしもあらぬか(因毛有奴可)自榜の我が衣手にいはひ留めむ

⑤一ラムカ形式 (15例)

01/0040 鳴呼見の浦に舟乗りすらむをとめらが玉裳の裾に潮満づらむか(三都良武香)

⑥一ムカ形式 (6例)

05/0877 ひともねのうらぶれ居るに龍田山御馬近づかば忘らしなむか(和周良志奈牟迦)

⑦モノカ形式 (7例)(*一モーモノカ1例含む)

04/0620 初めより長く言ひつつ頼めずはかかる思ひに逢はましものか(相益物歟)

⑧その他 (ケムカ2例、ジカ2例、一アルカ1例、一ヌカ2例、一体言カ7例)

例えば①でカに前接するのは眼前の事態であるのに対して、⑥では未成立の事態が言表される。また、①では眼前事態に対する発話者の感情がモに前接しているのに対し、③ではモが事態の主部に現れており、構文内に発話者の感情は言語化されない。このようにカ文の構文構造やカ文に現れる事態の有り様は多様であり、これらすべてに現れるカの意味を統一的に規定するのは難しい。そこで上代全体を共時態として捉えることに限界がある可能性を考え、通時論的な分析を試みる。

2. 通時論的考察

万葉集に収められている用例は、その初期と末期では約130年間の開きがある。記紀歌謡の用例は更に古い。そこで、以下の表のように分割する。^(註1) 8タイプのカ文の使用時期は、以下の通りである。なお、年代不明の用例を除くため、1に挙げた形式ごとの用例数とは異なっている。

表1 カ文の通時的使用状況

	記紀歌謡	第1～2期	第3期	第4期	合計
①—モーカ	1	3	2	4	10
②—モアルカ	1		1	10	12
③—モーヌカ			2	3	5
④—モアラヌカ				4	4
⑤—ラムカ	1	7		(3) ^(註2)	11
⑥—ムカ			1	3	4
⑦—モノカ				3	3
⑧その他				5	5

斜線の部分は、用例が無いことを意味する。万葉第2期以前は、①—モーカ、②—モアルカ、⑤—ラムカの3形式が存在し、後期以後、他の形式が出現することが分かる。以下で時期別に考察する。

2.1.1. 万葉前期以前のカ文

万葉前期以前において、カは①—モーカ形式、②—モアルカ形式、⑤—ラムカ形式に現れる。以下で形式別に考察する。

I. —モーカ形式

01/0018 三輪山をしかも隠すか(然毛隠賀)雲だにも心あらなも隠さふべしや
03/0265 苦しくも(苦毛)降り来る雨か(零来雨可)三輪の崎狭野の渡りに家もあらなくに
—モーカ形式は以下のような構文構造である。

三輪山を しか も 隠す か 雲だにも心あらなも隠さふべしや

発話者の評価	モ	評価の対象事態	か	副詞節・副詞的文
--------	---	---------	---	----------

苦しく も 降りくる雨 か 三輪の崎狭野の渡りに家もあらなくに

発話者の感情	モ	感情の対象事態	か	副詞節・副詞的文
--------	---	---------	---	----------

この構造は、カ文に対する疑問的・逆接的な副詞節・副詞的文が必ず共起する点で、連体形終止文と似ている。連体形終止文の構造は、尾上（1982）によって以下のように分類されている。（以下は本稿の筆者がまとめなおしたもの）

(A) 係助詞を含む文に後置する

- ① 疑問文に後置する
- ② 反語文に後置する
- ③ 強調文(……ゾ)に後置する

07/1416 玉桙の妹は花かも あしひきのこの山陰に撒けば失せぬる

(B) 逆接条件句に対する帰結になる、または文中に何らかの逆接的表現がある

10/1994 夏草の露別け衣着けなくに 我が衣手の乾る時もなき

連体形終止文の場合、文が表わすのは、文に現れる語そのものの意味ではない。「係助詞を含む文が表わす疑問、反語、強調など」と、「それが向けられる現実を描写する連体形終止文」の文脈的条件(A)や、「逆接条件句」と「連体形終止文」の対立という文脈的条件(B)に依存する「根拠」「きっかけ」「原因・理由」「事情・実情」「想起・気づき」「解説」「説明」「状況設定」「属性」「評価」「詠嘆」といった意味が表れる。勝又(2002)では、連体形終止文の表わす意味が、上記のような文脈や作歌状況といった語用論的条件によって決定されるものであるという点に注目し、「連体形終止文は文末の用言の持つ辞書的な意味に直接由来する判断には伝達の焦点がない」と結論した。

では、一モーカ形式において、この特徴はあてはまるだろうか。まず、カに前接するのは感情・評価が向けられる事態であり、その感情・評価は共起する文との文脈的条件によって生じる。この関係は連体形終止文と同様であり、カに前接する事態に伝達の焦点はないといえる。しかし助詞モに前接する位置に評価・感情が「しか」「苦し」と語で示される。一モーカ形式は、連体形終止文が文脈的にしか示さなかった評価・感情に焦点を当て、明示する形式といえる。また一モーカ形式には03/0265のように、連体修飾節を伴う体言にカが後接する例もある。その形式はカの前接要素にのみ注目すれば、以下のような無助詞喚体句に近い。

06/1057 鹿背の山木立を茂み朝さらず来鳴き響もす鶯の声

ただし、無助詞喚体句において、感情に下接するモは文中に出現しないことが近藤(2000)によって報告されている。この場合においても助詞モによって発話者の感

情が表される点は、一モーカ形式の特徴である。また、一モーカ形式は必ず係助詞を含む文と共に起するか逆接の文脈の中で使用されている点でも、無助詞喚体句とは異なる。以上に見られた一モーカ形式と連体形終止文、無助詞喚体句との相違は、カの機能によるものだと考えられる。

II. 一モアルカ形式

記54 山縣に 蒔ける菘菜も 吉備人と共にし摘めば 楽しくあるか(多怒斯久母阿流迦)
以下のような構文構造である。

山縣に蒔ける菘菜も吉備人と共にし摘め ば 楽しく も ある か
感情の対象(契機) バ 発話者の感情 モ アル カ。

前期の一モアルカ形式は記紀歌謡の1例のみである。本稿では一モアルカ形式を臨時に使用された形式であり、一モーカ形式の派生形式であるととらえる。理由として、発話者の感情「楽し」とその対象「山縣に蒔ける菘菜も吉備人と共にし摘む」の言語化されて共起している点が一モーカ形式と同様であることが挙げられる。また、助詞モに発話者の感情が前接する点も共通する。ただし、一モアルカ形式の感情の対象は、文脈的条件を必要としない点で、一モーカ形式とは異なる。一モーカ形式では、文脈的条件があることで、カに前接する感情の対象事態から伝達の焦点が外されていた。それと同様に、一モアルカ形式では、感情の対象を主題として明示するのではなく、バで契機的に示すことによって、感情の対象から伝達の焦点を外し、「楽し」という感情に焦点を当てている形式として理解でき、二つの形式は派生的であるといえる。

III. 一ラムカ形式

01/0040 鳴呼見の浦に舟乗りすらむをとめらが玉裳の裾に潮満つらむか(四寶三都良武香)
一ラムカ形式は以下のような構造である。

鳴呼見の浦に舟乗りすらむをとめらが玉裳の裾に潮満つ らむ か
事態 フ カ。

單文で実現する平叙文である。また、感情や評価を表わす語、係助詞モが共起し

ない。では、表される事態にはどのような特徴があるだろうか。まずラムの意味を考えたい。ラムは一般的に「現在推量」とされる。しかし、以下の用例を見ると、ラムに推量判断の機能を認めることは難しい。(拙稿(2012))

例えばラムが連体修飾部に現れるとき、下例のように愛惜や情意形容詞の対象を修飾する場合が多い。

05/0890出でて行きし日を数へつつ今日今日と我を待たすらむ父母らはも

01/0055あさもよし紀人羨しも真土山行き来と見らむ紀人羨しも

愛惜や情意形容詞の表わす感情の対象は、通常確定していなければならず、推量判断を表す語はその修飾部に現れにくいはずである。実際に調査した結果も、ラムと同様の環境には、ムがほとんど出現せず、過去に成立した事態を表わすキが出現しやすい傾向が見られた。

また、ラムが終止形で文末に現れるのは専ら、意思や希求命令(早く日本へ)の根拠をラム句が提示する型(01/0063)と、ラム句事態とその原因(秋風寒み)が提示される型(17/3953)である。

01/0063いざ子ども早く日本へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ

意志や命令希求を表す文が共起する01/0063のような環境に推量は現れにくい。希求・命令文と、ム終止形終止が同歌中で使用される64例中、ムが推量を表す場合は6例に過ぎなかった。

17/3953雁がねは使ひに来むと騒ぐらむ秋風寒みその川の上に

17/3953は原因理由文(秋風が寒いから、雁がねが騒ぐ)である。原因理由文には、原因から結果を述べ、事実的な因果関係を表す「順行」と、結果から原因を述べ、後件に推量判断が必ず現れる「逆行」がある。ラムは全て順行後件に現れており、逆行後件に出現することはない。以上の根拠により、ラムに推量判断の機能を認めることはできない。

したがって、一ラムカ形式は、感情を表わす語や助詞モを共起させず單文で実現し、眼前にない事態を推量判断を加えずに述べる平叙文ということができる。

2. 1. 2. 前期カ文におけるカの意味

連体形終止文、無助詞喚体句では語として現れにくい発話者の評価・感情が、一モーカ形式において、助詞モに前接して必ず現れるという特徴が見られた。この

特徴には、一モーカ形式における対象に対する発話者の把握の在り方が表れている。尾上（2001）は、形と意味の関係から喚体を捉え、表現内容ことばの形の間に乖離があるのが「喚体」であると規定する。

(a)三笠の山に出でし月かも (b)妙なる笛の音よ

(a)は「月」という言葉の形で「感動」という内容を表わす。しかし(b)は「妙なる」が「評価」を表し、内容も「評価」である。内容と言葉が一致しているため、尾上の述語では「述体」となる。したがって、感情が言語化されない連体形終止文、無助詞喚体句が「^(注3)喚体」的であり、感情が言語化される一モーカ形式は「述体」的と言うことになる。

喚体の対象は、その語自体が感情的経験を表すというあり方であり、喚体は感情を形容詞的に決定する余裕のない、心の動きそのものを述べたあり方である。それに対して、述体としての性質として、尾上は「ことに対する承認」を挙げる。「承認」の機能が働いた結果、モノとして述べられた対象から感情を分離し、対象を感情の機縁としての事態として述べることができるようになる。連体形終止文、無助詞喚体句における連体句、名詞句は「承認」される以前のモノとして述べられているのに対して、一モーカ形式におけるカの前接事態は、発話者に「承認」されたコトとして述べられており、そこから分離された感情が言語化されてモに前接していると説明することができる。

また、一モアルカ形式における感情の対象は、助詞バが後接して契機として述べられている。一モーカ形式に比べて、対象事態はコトとしてより自立している。この形式において、形式的にはアリがカに前接している点は注目される。対象が契機的に述べられる場合であっても、一モーカ形式において対象が出現した位置に形式的にアリを設置する必要があった。助詞バに前接している事態が本来的に出現する位置に痕跡としてアリが出現しているのではないか。感情の対象となる事態が「承認」され、発話者の感情を分離して言語化するためには、事態はカに前接する必要があったのだと思われる。以上により、対象と感情を分離する「承認」機能をカが担っていたのだと考える。

ではこの「承認」機能は一ラムカ形式においてどのように働いていたのか。一ラムカ形式は、形式的には感情を表わす語や助詞モを共起させず単文で実現し、眼前にない事態をそのまま述べる平叙文であることを述べた。平叙文によってそのまま

描写された事態が承認されると、詠嘆の感情が表出される。尾上(2001)では、ある一つの事態を情意の機縁として語ることによって実は感情的経験そのものを表現するということと、その事態を深い感慨を持って描写、承認すること(平叙文による詠嘆)とは、事実としてはかなり近いものと言わなければならぬ。ある機縁によってひきおこされる感情的経験とは、その機縁が主述的な形態をとってあからさまにこととして表現されている場合には、結局その事態の発見にともなう感情の生起ということにほかならず、それはその事態の承認にともなう詠嘆ということとかなり近接していると言えよう。

と説明される。ある一つの事態を情意の機縁として語ることによって感情そのものを表現する形式(c)、事態を深い感慨を持って描写、承認する平叙文による詠嘆(d)とは以下のような表現である。一ラムカ形式は、事態を深い感慨を持って描写、承認することによって詠嘆を表す表現だといえる。^(注4)

(c)花！

(d)花が咲いている(なあ)。

一ラムカ形式が単文であることも、この形式が感情を表わす文であることを示す。ラムは連体修飾語として使用される際には愛惜や感情の対象を構成しやすかった。加えて、終止形終止文において常に01/0063・17/3953のような論理的な構造を要求していたラムが単文で使用されるという文脈的条件は、感情や評価が生じるものであると説明できる。しかし、文脈的条件によって、感情や評価を表わす文であるならば、「一ラム(連体形)」という連体形終止文であってもよいともいえる。なぜカが後接しているのか。2.1.1で触れたように単文の連体形終止文は上代においては許容されない。そこで、終助詞が要求され、事態の「承認」を示すカを選択することで感情を表わしたと考えられる。

また、一モーカ形式においては、感情の対象が承認されることによって、評価や感情が分離したにも関わらず、一ラムカ文においては評価や感情は語に現れないことも説明されなければならない。これは、一ラムカ文における感情の生じる文脈的条件が、一モーカ形式とは異なることが原因であろう。一モーカ形式を見る限り、語で表わされる感情は、共起する文や句との因果関係が成り立たないことに起因するものであった。対して、因果関係を敢えて示さないことによって感情を表わす文が一ラムカ形式である。一モーカ形式が表わす感情・評価と一ラムカ形式が表わす

それとは、生じる過程が異なっており、それを原因として一ラムカ形式においては感情が明示されないのでないのではないか。文末ラムが表わす特有の感情や評価は、助詞モと排他的であった可能性がある。助詞モの機能については、まだ明らかになっていないことが多いが、例えば、文末に現れるカモの構成要素として助詞モを仮定してみると、万葉集中に500以上あるカモの用例のうち、ラムに接続している例は以下の2例のみである。

08/1436 含めりと言ひし梅が枝今朝降りし沫雪にあひて咲きぬらむかも(将開可聞)
大伴村上

10/2332 さ夜更けば出で来む月を高山の嶺の白雲隠すらむかも(将隱鴨)

その上、2例とも訓読例であり「ラムカモ」と続く確例は無い。いずれ稿を別にして論じる必要があるが、ラムを含む一ラムカ形式は、一モーカ形式とは異なる論理で感情を表わす文であり、モが共起できない環境であったようである。そこで、ラムカ形式は、感情を言語化するのではなく、事態をそのまま描写し承認することによって詠嘆を表わす形式として成立したのである。

2.2.1. 万葉後期のカ文

後期に新たに現れるのは、⑥一ムカ形式、③一モーヌカ形式、④一モアラヌカ形式、⑦一モノカ形式である。以下で各形式を考察する。

IV. 一ムカ形式

05/0877 ひともねのうらぶれ居るに龍田山御馬近づかば忘らしなむか(和周良志奈
牟迦)
山上憶良

一ムカ形式は、以下のよう構造である。

ひともねのうらぶれ居るに龍田山御馬近づか	ば	忘らしな	む	か
想像・推論される事態		想像・推論の中の事態		

この形式は、そのほとんどに仮定条件を表す助詞バが現れる。言表事態「忘らしな」は、発話者の想像・推論という条件(一バ)で成立する事態であり、発話者の推量判断という営みを離れては成立しない。明らかに推量判断された事態である。そのような事態がカ文で言表される点が、前期カ文の特徴とは異なる。

また、発話者の感情は言語化されない。しかし、作歌状況によって、感情は表されている。05/0877は大伴旅人との別れの際に、山上憶良が詠んだ歌である。「友人と別れ」は典型的に感情的経験を引き起こす事態であろう。この例では、助詞バで示された「立田山にお馬が近づいた」という想像・思考の中で成立すると推量される「あなたはすぐに私たちのことを忘れてしまう」という内容がカに前接する。「すぐに私たちのことを忘れる」という事態は、「友人と別れ」に引き起こされる「寂しい」「悲しい」のような感情を含意した表現だと理解できる。

V. 一モーヌカ形式、一モアラヌカ形式

- 04/0520 ひさかたの雨も降らぬか(雨毛落梗)雨障み君にたぐひてこの日暮らさむ
大友女郎
- 04/0708 またも逢はむよしもあらぬか(因毛有奴可)自榜の我が衣手にいはひ留め
む
栗田女娘子

一モーヌカ形式は、以下のような構造である。

ひさかたの雨も降ら	ぬ	か	雨障み君にたぐひてこの日暮らさむ
非存在事態(一モー)	ヌ	カ。	言表事態に対する副詞節・副詞的文

ほとんどが2文で構成されている点は、前期の一モーカ形式と同様である。しかし、感情は言語化されず、文脈的条件や、助詞モの出現位置は一モーカ形式と異なる。カ文でない文は発話者の意思（雨に降り籠められて今日一日をあの人と過ごそう）を表し、カ文はその意思に反する事態（雨が降らない）を描写する。この文脈的条件からは「希求」の意味が読み取れるが、「希求」自体は語で示さない。また、助詞モは意思に反する事態の格関係の中に使用される。更に、眼前事態について「打ち消し」のズを使用して、非存在の形で述べることも、この形式の特徴である。

一モアラヌカ形式も一モーヌカ形式同様に、意思や願望と反する事態がカに前接する。また感情的経験は文に明示されないが、文脈的条件から「希求」が生じる点、非存在を述べる点で、一モーヌカ形式と同じ傾向を持つ。

またも逢はむよしもあら	ぬ	か	白榜の我が衣手にいはひ留めむ
非存在事態(一モアラ)	ヌ	カ。	言表事態に対する副詞節・副詞的文

VI. 一モノカ形式

07/1402 こと放けば沖ゆ放けなむ港より辺著かふ時に放くべきものか(可放鬼香)

こと放けば沖ゆ放けなむ 港より辺著かふ時に放く べき ものか

言表事態に対する副詞節・副詞的文 、 言表事態 べき モノか。

カに前接するモノ句は、眼前にあったり、発話者が経験している事態である。しかし、事態をそのまま描写しているのではなく、ベシやマシを後接し、発話者の判断を離れては成立しない形で述べる。判断が介入している点で一モノカ形式と近い。「こと放けば沖ゆ放けなむ(同じ遠ざけるのなら、沖で遠ざけてくれたらよかった)」のように、他の文や従属節によって願望が示される文脈的条件にあり、発話者の「希求」を含意していると理解できる。

2. 2. 2. 後期カ文におけるカの意味

後期に新たに現れた形式のカ文の特徴として、まず、カに前接する事態が、発話者の判断を含んだり、非存在の形で述べられる点がある。この特徴は述体に見られるものである。喚体の対象は情意内容を形容詞的に決定する以前のモノとして表現されるからこそ、感情を含意できるのであり、通常、その事態に発話者の判断が現れることはない。また近藤(2000)が無助詞喚体句について、

打消しの助動詞が連体修飾するものが七例あるが、それらは、すべて

・天の川瀬を早みカモねばたまの夜ハ更けにつつ逢わぬ(不合)彦星(一〇卷二〇七六)

・神のごと聞こゆる瀧の白波の面知る君が見えぬ(不所見)このころ(一二卷三〇一五)

のようなものであって、骨子たる体言そのものの非存在を語るものではない。と指摘する通り、典型的な喚体には、非存在を対象とする一モノーヌカ形式のような例はない。非存在の表現は、眼前をそのまま描写しているのではないため、判断に類する性質を持ち、一般的な喚体表現には適さないのだと思われる。

この特徴に反して、上記の後期カ文には、文脈的条件から何らかの感情が表わされていると理解されるにもかかわらず、「発話者の感情が言語化されない」という喚体的特徴もみられた。

後期カ文は、「発話者の判断」という要素を含む事態を述べることで、感情を表

わしている。言い換えれば、要素としては述体的でありながら、文全体の表現としては喚体的である。判断を含む事態を喚体的に表現するためには、発話者の判断を無効にする必要がある。力がその働きをしていたのではないか。後期カ文における力の働きは「判断保留」であると考えられる。

3. 変化の要因と前期カ文への影響

以上、力の機能が「承認」から「判断保留」へ変化したことを述べた。その要因を、助詞モの前接要素に注目して考える。

前期カ文において、助詞モは発話者の感情に常に下接しており、対象事態と分離されている。一モアルカ形式において、対象事態が一バの形で契機的に現れ得たのも、助詞モに上接する要素と対象事態が完全に分離していたからである。対象事態の実現を表すアリが力の直前に必須だったのは、感情を明示する助詞モ以前の要素に力のスコープが及ばず、契機的に示されたバ節をアリで言い換える必要があったためだと説明できる。

しかし、後期に新たに現れた形式では、一モ一ヌカ形式に見られるように、助詞モは力の前接事態の中に出現する。これは、力のスコープが拡大し、助詞モを含むようになったことを示す。

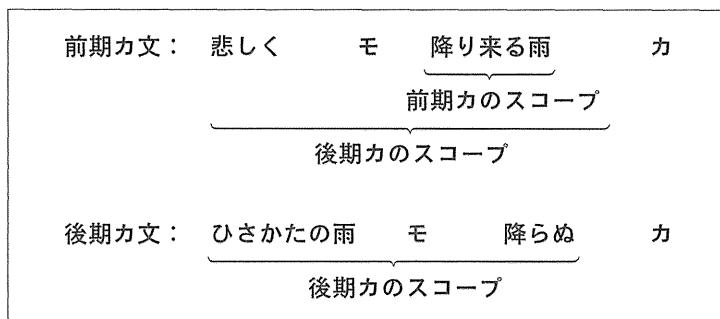


図1 力のスコープの変化

このスコープの拡大は、前期に存在した各形式にどのような影響を与えたのか。力のスコープが拡大することによって、力の前接事態は、発話者の感情と感情の対象を含んで解釈される。言語化された発話者の感情とその対象という述体を構成す

る要素を、喚体的にまとめる働きとして力は再解釈されたのではないか。

後期の一モーカ形式は、まさしくこの特徴を持つ。逆接や係助詞を含んだ文脈で使用されることが必須ではなくなり、「連体形終止文が文脈的にしか示さなかった評価・感情に焦点を当て、明示する形式」という分析は成立しなくなった。

03/0245 聞きしごとまこと尊くすしくも神さびをるか(神左備居賀)これの水島

長田王

19/4204 我が背子が捧げて持てるほほがしはあたかも似るか(安多可毛似加)青き蓋

天平勝宝2年4月12日、恵行

「まこと尊くすしくも神さびをる(本当に尊く不可思議に神々しくある)」「あたかも似る(さながらそっくりである)」という感情や評価を含む一モーカ全体が力のスコープに入り、その事態を述べることで感情を意味する文となったのだと考えられる。要素としては述体的でありながら、文全体の表現としては喚体的である点で、新出の後期カ文と同じ特徴を持つ。

つぎに一モアルカ文を見る。前期一モアルカ文は、助詞バが共起し、感情の対象を契機的に示していた。しかし、後期一モアルカ形式には、事態を契機的にあらわさない以下のような形式が見られるようになる。

04/0666 相見ぬは幾久さにもあらなくにここだく我れは恋ひつつもあるか(戀乍裳
荒鹿) 坂上郎女

04/0666は「我」が助詞ハで主体として記されており、意味的にも形式的にも「AハB」が力の前接事態であると理解される。助詞モは力の上接事態の内部に完全に含まれており、「我は恋ひつつもある」が力のスコープに含まれる。また、「我は恋ひつつもある」という事態は、「相見ぬは幾久さにもあらなくに」と逆接条件節で述べられている通り、「あっていいのはそんなに長い期間ではない」という事態から予測された事態に反する事態である。したがって、文脈的に発話者の感情的経験は引き起こされていると見ることができる。助詞ハが共起する「AハB」という述体的な形によって、感情が含意されるという喚体的な表現が可能になっている。

以下の例はまた異なる。

18/4105 白玉の五百つ集ひを手にむすびおこせむ海人はむがしくもあるか(牟賀思
久母安流香) 天平感宝1年5月14日、大伴家持

「むすびおこせむ海人」とあるとおり想像の中の海人に対して「むがしくもある」

と述べる形である。助詞モに前接する語は04/0666とは異なり、発話者の感情であるが、やはりアリがその契機となる事態の実現を表していると考えることはできない。「A ハ B」の形で、対象となる「海人」に対して発話者が「むがし」という感情を述べており、発話者の感情自体を言表する用法をカ文が獲得しているといえる。この変化は、カの「判断保留」機能が更に進んだことを示す。後期カは専ら感情の対象事態に下接して対象をモノとして述べることで、発話者の感情を表した。カに上接する位置は常に発話者の感情を表す要素が出現したといえる。そしてカの働きが定着するに従って、発話者の感情を言語化する形容詞などの要素にもカが下接することが許容されるようになったのだと考えられる。カの変化によって、後期カ文には、多様な形式が成立したのである。^(注5)

ただし、この変化によって一ラムカ形式は存在しなくなる。一ラムカ形式は助詞モを含まず、カのスコープによって全体が捉えられていたため、カのスコープを拡大することはできなかった。さらに、ラムは判断を加えずに述べる機能を持つため、後期カが保留するべき「判断」に当たる要素はラムカ形式に存在しなかったのである。

4. まとめと今後の課題

万葉前期のカは「承認」機能を担っていたが、万葉後期においてカは「判断保留」という機能を持つようになったことを明らかにした。そして、その変化の要因はカのスコープが拡大し、事態に対する発話者の判断や評価がカのスコープに入ったことにあると述べた。モノとして喚体的に述べられた対象から感情を分離する前期カの「承認」機能は、喚体を述体に変換する機能である。それに対し、発話者の判断などを含み述体的にコトとして述べられた事態を、発話者の判断を保留して感情を含意する表現にする後期カの「判断保留」機能は、述体を喚体に変換する機能であると捉えられる。述体、喚体という文のあり方を変換する機能をカは担っており、その機能が変化している様相を記述した。

中古以降、カは疑問表現によく出現するようになるが、後期カの「判断保留」機能が疑問表現に使用されるのは自然である。また、中古以降、文末形式カモが使用されなくなる。本稿で明らかになったカの変化が、モとの接続関係に影響を与えた可能性も考えられるため、引き続き調査したい。

注

(1) 第一期：～671、第二期：672～709(壬申の乱平定以後)、第三期：710～733(平城京遷都後)、第四期：734～(山上憶良没後)とし、前期は第一期・第二期、後期は第三期・第四期を意味する。なお、第一期の用例は「一モーカ」1例のみである。

(2) 以下の3例は、第4期に現れたーラムカの全例である。

15/3610 安胡の浦に舟乗りすらむ娘子らが赤裳の裾に潮満つらむか(之保美都良武賀)
天平8年

19/4287 鶯の鳴きし垣内ににはへりし梅この雪にうつろふらむか(宇都呂布良牟可)
天平勝宝5年1月11日、大伴家持

20/4319 高圓の秋野の上の朝霧に妻呼ぶ壯鹿出で立つらむか(伊泥多都良牟可)
天平勝宝6年、大伴家持

15/3610は、左注から、柿本人麻呂の和歌を元にしていることが明らかである。残りの二首は共に大伴家持が詠んだ和歌である。平安時代に入っても「ーラムカ」という形式は現れない。第三期以降、「ーラムカ」という形式を使ったのは大伴家持一人である。この事実から、「ーラムカ」は第四期に一般的に使用された形式であると本稿では考えない。

(3) 連体形終止文は、対象事態を言語化することで感情を表わす。これは喚体の特徴の一つである。この点に注目し、本文中では連体形終止文を「「喚体」的」と表現した。しかし、文脈を常に要求しており、事態の「現場性」が希薄である。その意味で、典型的な喚体とは質的に異なるものと言える。この性質を述体と喚体の間でどのように評価するべきか、今後の課題である。

(4) ーラムカ形式を「～だろうか」のように疑問的に理解する立場もあるが、ラムに前接するのは話者にとって確定した事態であり、疑問的に理解できない例があることを示す。以下の例を見られたい。

09/1696 衣手の名木の川辺を春雨に我れ立ち濡ると家思ふらむか(家念良武可)

作者：柿本人麻呂歌集

「肌着が泣き(名木)の涙で濡れるという名木の河辺で、私が春雨に濡れてしまふり立っていると妻は思っている」という事態にラムカが続く。この例に続く09/1697・09/1698の例を併せて考えると、この事態は発話者にとって確定していたことが分かる。

09/1697 家人の使にあらし春雨の避くれど我れを濡らさく思へば 柿本人麻呂歌集

09/1698 あぶり干す人もあれやも家人の春雨すらを間使にする 柿本人麻呂歌集

09/1697は、執拗に降る春雨を、自分のことを心配するあまりの家妻の使いとしか思えない解した歌であり、09/1698は、「濡れた着物をあぶって乾かしてくれる人が側にいる」とでも思っているのか、家の妻は春雨までを使いに寄こして目を光らせている」とい

う歌である。09/1697・09/1698の歌は、09/1696の「名木の河辺に私が立っていると妻は思っている」という事態が、発話者にとって確定していたことを前提として作成できる歌である。

02/0132 石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか(妹見都良武香)

作者：柿本人麻呂

02/0132は妻と別れて上京してくるときの歌である。これらは「木の間からわたしが振る袖を妻は見たであろうか」と疑念をこめて解釈されることが多いが、見ているかどうか疑わしい妻に向かって袖を振ることは不自然であろう。こちらから確認することはできないが、妻が見ていることを信じて、袖を振っていると理解したほうが自然である。

(5) カを分析する際に、万葉前期と後期を共時態としてとらえられないことを述べた。前期一モーカ形式、一モアルカ形式は、後期カ文と同様の分析をすれば「判断保留」とも解釈できるものである。しかし、前期に存在したーラムカ形式を構成するラムには保留するべき「判断」の機能がないため、前期カの機能を「判断保留」と考えることはできない。また、カの機能が通時論的に変化していると捉える本稿の仮説は、カ文の構文構造の変化という事実を説明することができる点でも妥当性が高いと考える。

参考文献

- 伊藤 博 (1995–1998) 『万葉集釈注一～一〇』(集英社)
大野 晋 (1993) 『係り結びの研究』(岩波書店)
尾上圭介 (1982) 「文の基本構成・史的展開」(『講座日本語学二』、明治書院)
尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』(くろしお出版)
勝又 隆 (2002) 「上代における連体形終止文の機能」(『名古屋大学日本語学研究室過去・現在・未来』、名古屋大学大学院文学研究科)
川端善明 (1963) 「助詞「も」の説——二、心もしのに鳴く千鳥かも——」(『萬葉』48)
近藤要司 (1991) 「万葉集の助詞カと助動詞ラムについて」(『四国女子大学紀要』11(1))
近藤要司 (2000) 「『万葉集』における無助詞喚体句について」(『親和国文』35)
拙稿 (2010) 「ラムと終助詞カの接続関係に関する一考察」(『名古屋大学国語国文学』103)
拙稿 (2012) 「上代におけるラムの意味的機能について」(『2012年度日本語学会春季大会予稿集』)

(こいで・よしこ／名古屋大学大学院博士後期)